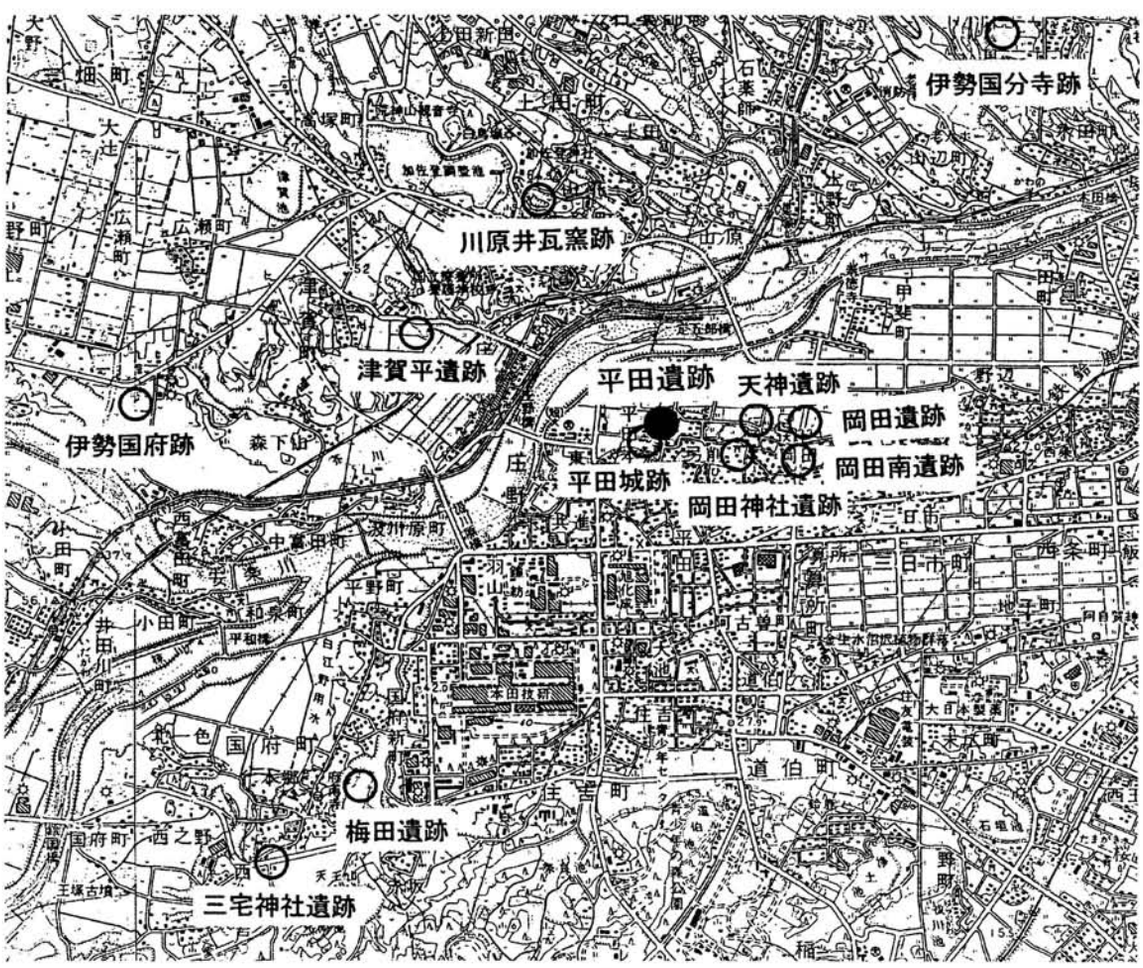
平田遺跡

現地説明会資料
平成１６年７月１８日（日）
１０：００～

所 在 地	鈴鹿市平田一丁目
調査目的	宅地造成に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間	平成１６年４月５日～７月２０日（予定）
調査面積	約２，２００㎡
調査担当	鈴鹿市考古博物館



周辺の遺跡

《はじめに》

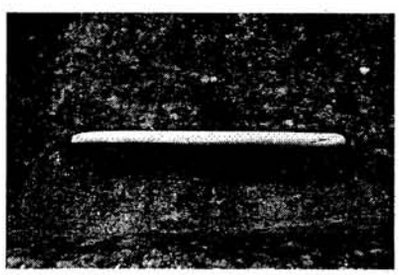
平田遺跡は，鈴鹿川右岸の標高約 22mの河岸段丘上の辺縁部に位置します。平田遺跡の周辺にはいくつかの遺跡があります。南西に近接して中世城館・平田城跡，東には天神遺跡(古墳時代)，岡田南遺跡（古墳時代～中世)，岡田神社遺跡(中世)などの集落遺跡があります。また，鈴鹿川の対岸には，伊勢国分尼寺で使用された瓦を生産した川原井瓦窯や，官人の制服の革帯につけられた石製の帯飾りが出土した津賀平遺跡などがあります。

《調査の成果》

今回の調査では，弥生時代から中世にかけて，多くの遺構を検出しました。古代の遺構は主に西側で確認されました。中世の遺構は調査区の全体で確認できていますが，特に北東部に集中しています。

【弥生時代後期】

L字状に曲がる幅１ｍほどの溝を検出しました。方形周溝墓の可能性があります。この溝からは縄文時代晩期の石刀が意図的に置かれたような状態で出土しました。ほとんど完全な状態の石刀が発掘調査で出土したのは鈴鹿市では初めてです。柄の部分には「×」「＝」の模様が彫られています。



（石刀出土状況）

【古墳時代前期】

竪穴住居 ST04 は，１辺 7.6mを測る大きなものです。中央のやや南よりのところから赤彩の壺が出土しています。ST04 の北東にも竪穴住居の一部と思われる ST122 を確認しています。埋土の状態から，同時期の竪穴住居である可能性が考えられます。

【飛鳥時代】

竪穴住居４棟（ST07，ST23，ST24，ST54）を確認しました。ST23 と ST24 は重複しています。その切り合い関係から ST23 の後に ST24 を建てていることがわかりました。ST07 のみ離れたところに位置し，他と比べて小型ですが，同じような瓦が ST07，ST24，ST54 から出土していることから，同時期の竪穴住居と考えられます。その他，暗文土師器や須恵器なども出土しています。

【飛鳥時代～奈良時代】

建物の柱穴の重複関係が少なく，建物が建てられた時期，前後関係などはっきりとわかっていませんが，建物の方位などで大きく３つにグループ分けがで

きそうです。

① SB01，SB09，SB135

真北に近い方位をとります。SB01，SB09は建物の西側のみを検出しているので全体の規模は不明です。SB01は梁行３間，桁行２間以上の身舎の四方に庇の付く建物と考えられます。南北10.6m(庇を含む)，東西6.9m以上の規模を測ります。柱を据えるために掘られた穴（柱穴）の規模は最大のもので1.1m×1.4mを測ります。SB09（梁行３間，桁行３間以上）はSB01の北，およそ13mのところに位置し，同じ方位をとります。南北5m，東西5.8m以上を測ります。SB01と共に計画的に建てられたものと思われます。SB01の南約20mのところでかろうじて検出したSB135（東西２間，南北不明）もおそらく同様の方位をとると思われます。

②－１ SB16，SB17，SB65，SB78

建物の方位がやや西へと傾きます。SB17は東西４間（8.1m）×南北２間（5.7m）の規模で南側に庇を持ちます。SB17の南には東西５間（9.6m）の規模のSB16が建ちます。近接しているため，同時に存在したかは不明ですが，ほぼ同じ方位で，SB17の柱と柱の中間にSB16の柱が建てられています。SB17の東側には方位をそろえてSB78（南北２間，東西２間以上）が建てられています。また，SB17から50mほど南に位置するSB65もほぼ同様の方位をとります。

②－２ SB03，SB31，SB41

これらの建物も西へと傾きますが，SB03，SB31，SB41のいずれも方位はそろっていません。また，②－１で挙げた建物群とも方位がそろいません。SB03は南北３間，東西２間以上で南に庇が付きます。SB31は２間×２間の総柱建物で倉庫と考えられます。SB41は南北３間，東西３間以上です。

③ SB02，SB90

建物の方位が東へと傾きます。SB02とSB90の方位はそろいません。SB02は

南北２間，東西２間の総柱建物で，倉庫と考えられます。SB90 は南北４間以上，東西は不明です。掘立柱建物 SB90 は竪穴住居 ST04 を，SB02 は ST122 をそれぞれ切っています。

【中世】

掘立柱建物 SB29 は東西３間，南北４間以上の総柱建物です。直径 30 センチ前後の柱穴の中には柱が沈まないようにするために，石が据えられていました。この建物の周囲を２重の溝が取り囲みます。方形の区画のほぼ中央に建てられたようです。この区画は東西約４２ｍを測ります。溝からの出土遺物から鎌倉時代と思われます。他にも SB37（南北２間以上，東西２間），SB80（南北２間以上，東西２間以上）が確認されています。

井戸 SE116，SE121 は直径１ｍほどの円形の素掘りの井戸です。山茶碗や土師器の皿などが多く出土しています。

御門垣内古墳として鈴鹿市の遺跡地図に登録されていた塚状の高まりは盛土に瓦などが含まれており，古墳ではないことがわかりました。斜面からは土師器の皿や山茶碗がほぼ完全な形で出土しています。溝 SD11，SD12 はこの土塁に伴うものと考えられます。

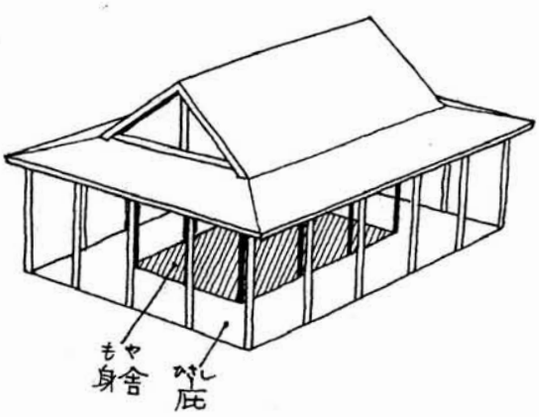
《まとめ》

今回の調査では，古代から中世にかけての遺構が多く検出されました。特に注目されるのが，大型の四面庇建物 SB01 です。その北には SB01 と共に計画的に建てられたと思われる建物 SB09 があります。四面庇建物は古代の役所の中心である建物（政庁）や国司の館の主屋などでみられ，格式の高い建物と考えられています。瓦や円面硯，暗文土師器などが出土していることからも，一般的な集落とは考えられず，古代の役所に関連する遺跡の可能性が考えられます。しかし，SB01 を中心に役所跡で見られるような「コ」の字型の配置をとるのか，今回の調査ではわかりません。また，役所跡では施設を継続的に使用するため，同一箇所で建て替えられていることが多くありますが，今回見つかった建物群は場所を変えながら建てているようです。現時点では郡司などこの地域の豪族の居宅の可能性が高いと思われます。

中世の遺構については出土遺物から鎌倉時代が中心と考えられます。平田城

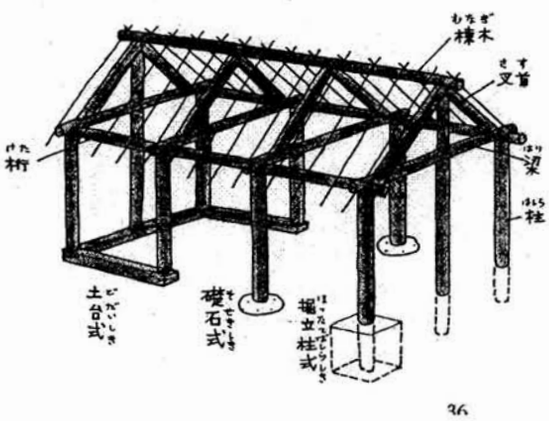
については平田氏が応仁元（1467）年に城を枚田郷平田に移したという伝承が残っていますが，今回検出した遺構は残念ながら平田城に直接関連するものは見つかっていません。

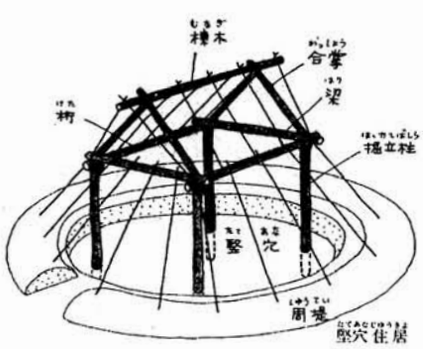
参考



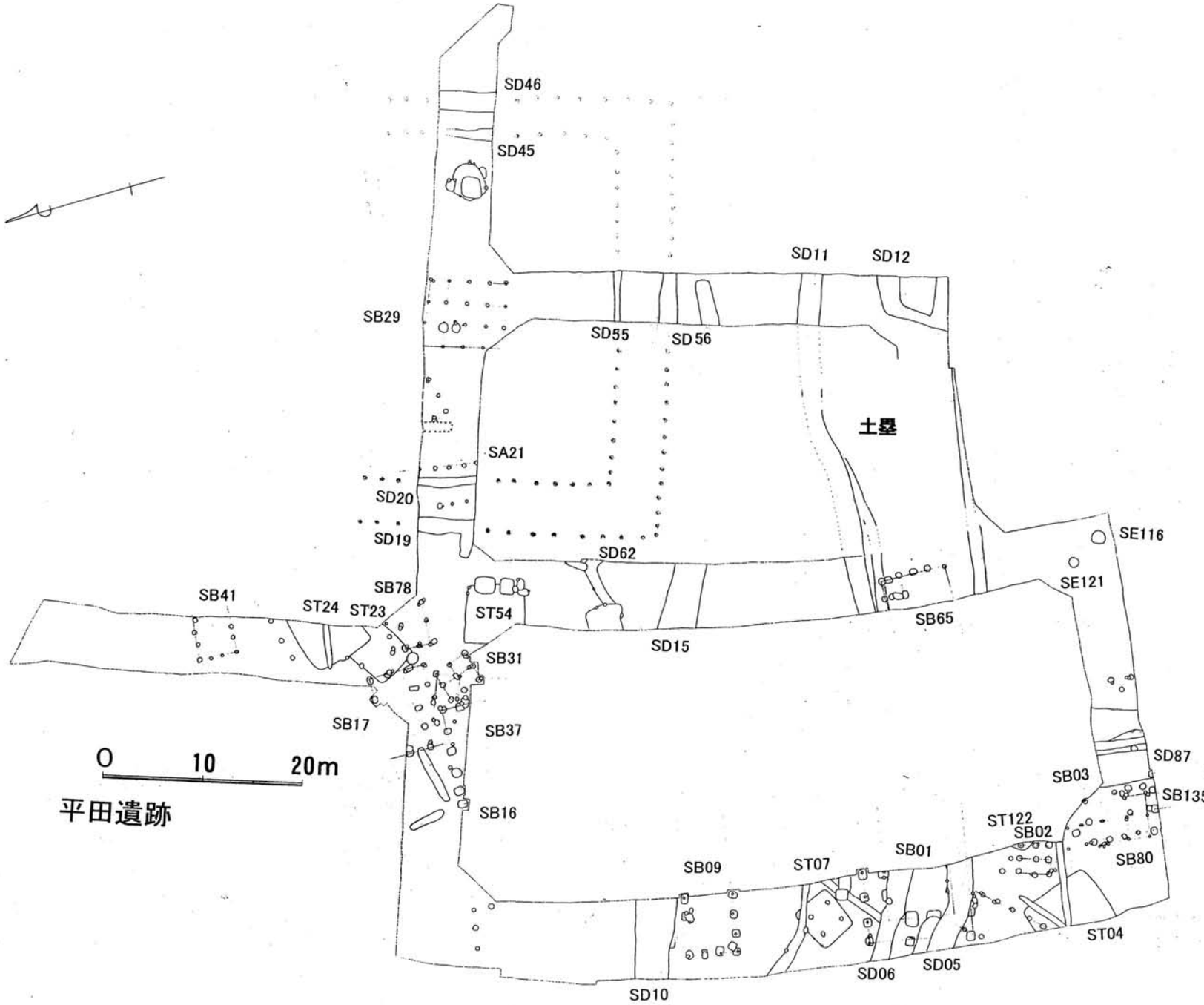
四面庇の建物（入母屋造り）

二面庇の建物（切妻造り）





宮本長二郎『平城京　古代の都市計画と建築』より


SD46
SD45
SD11
SD12
SB29
SD55
SD56
土塁
SA21
SD20
SD19
SD62
SE116
SE121
SB78
SB41
ST24
ST23
ST54
SB65
SD15
SB31
SB17
SB37
0
10
20m
SD87
SB03
SB135
SB16
ST122
SB02
SB01
SB80
SB09
ST07
ST04
SD06
SD05
SD10

平田遺跡